0 11 ま わ 相が が れ つ 模が て、 る 屋 好 0 大久 若 な ( ) 男 旦 ŋ 保 ま の 那 新 癖 0 た。 寮 に 助は二十 に 去年 泊 り 込 あた み 0 り 古 まま、 か 11 形容 らす 庭 で つ かり、 の す いな ながち が で 大弓 H 一日暮すこと 本橋業 に 凝 って

談 主 人の喜兵衛 雨 を降 らせましたが、 はそれば か 新 り心 助 はそ 配 れに て、 親類 耳を傾けようと Þ 知己 に 頼 bん 縁

乃 が あ ح とな 伊 振 大久 それが大当て違 ŋ 保 ら、 な 向 け 0 の つ て、 権治 若 寮 旦那新 間 0 大弓に が 留守番 0 ょ  $\Box$ 助 か く ( ) 凝り始 で、 ら店 ば、 に 0 は 趣味を、 道楽者 遊 0 店 方 めたという情報が、 び 中 0 ^ 伝え の茂七までが、 歌舞伎芝居なり、 の道楽者茂七を置 つ 5 も覚え れ ま した させよ 木: 大 克ィ 伊ァ う 久 江 ć ý 保 ع 戸 て 小 取 に 唄な Þ り 出 が木 来 つ て た る ŋ

が、 る 浪人者佐 相手 そ とも の代 書き、 り遊 師範 々 村佐次郎、 弓 とも び友達にはこの  $\boldsymbol{b}$ ょ なる 引き、 これは二十六七、 0 は、 法ほ 上も 螺ら 同じ大久保 ょ な 調法な男でし 吹く 男が好く、 0 ツイ近所に 向う 身 器 た は 用 住 持 ん で で 字

近 頃 そ 油 の 日 P 昼頃か つ て 来た ら始ま 新 助 って、 は、 な 申刻 刻前 か な か 止そ は うと か な り 草 队 で たび 11 うこ とを言 れま た ま が

せん

熱心

も宜

11

が

お

茶を淹

れ

る

0

を忘れ

て

は

困

るな、

俺

は

咽だ

で

b

濡 5 て来る」

佐 々 村 佐 次郎 は町 人風なぞん ざい な П を 利 e s て、 そそくさと肌

を入 れると、 苦笑を残 して立ち上が りました。

十 月と *( )* つ ても、 半 日 陽 に照り つ けられ ると、 全く 楽で は あ ŋ

ませ ん。

そ れから又し ば ら

若 旦那、 お茶 べても淹 れ させまし ようか。 当る当らな 11 と言 って

Ŕ およそ程 合 11 0 あるもので、 今日はまるで 的と 0 方 が 逃げ

て いるようですぜ」

茂七は おどけた顔をしました。 主人にこん な事を言 11 な がら、

少 しも怒らせな いような、 滑ぬ ら か な調子が あります。

無礼なことを言うな、 茂七、 お前が見て いる か ら 当らな 4

だ。 向うを向 いて いるが e s , *i* 本で金的を射止 め る から」

ヘエ」

「お前の顔を見ると、 大概 0 的 は 逃げ出すよ。 後 向きに な つ て 御

覧

「矢を 持 つ 7 駆 けて 行 つ て、 的 ^ 穾 つ 立 て る ん じ Þ な 11 で

ね、 若旦那

「馬鹿 に ては 11 け な *i y* 私は 本当 に 怒るよ」

エ ^ 工 ح  $\lambda$ な 工 合に ?

茂七 は 神 妙に後向きになりま した。

顔 P そ っち ^ 向 けるんだよ。 眼 の 隅 か 5, チラチラ見 た り

ち Þ け な e st

エ 驚きましたネ、 的 0 方が 飛んで来て、 食 4 付きゃ

死の矢文 ません

か

付け 入った稽古矢を 冗 小菊 談を言う茂七に 手馴れた弓に へ細々と認めて、 一本選ると、 は つがえて、 取 り合わず、 寸 そ 幅 0 ひょうと射ました。 ほ 根 どに畳んだ 0 新 方 助 は ^ 本矢に 袂 0) か を 5 近 丰 取 *( )* 頑<sup>が</sup>るこ IJ 出 IJ た矢文 び

矢は垜っ 庭 0 ば -植木屋 5 の上を遥かに越えて、 0 後 の松五郎 の庭 その後の疎らな木立を と飛んで行きます。そ 抜 れ け か 隣 ほ ŋ

う宜 ( ) んですか、 若旦那」

11 つ そう言う茂七 よで 0 声 ٚڮ 植木 屋 0 庭 か 5 聞える 不 気味 な

新

助は

何

とも

知

れ

ぬ

予感

に、

サ

ッ

顔

色を変えます。

何 で う? 若 旦 那

矢 は、 新 助は立ち尽しま 11 つでも 松五 郎 し た。 0) 娘 0 お の 駒 上を越して、 が、 間 もなく木戸を開 隣りの 庭 けて、 射込ん だ

捧さ げ 飛 で参りました』 新助 0 手 へ渡 してく そう言 れる *( )* の ·ですが、 ながら、 袂に 今 日 くる は つまで ん うに

7 駒 0 姿は 見えま せ ん。

声や、 で れば を か 呼ぶ千切れ り でなく、 隣 切 り 0 庭 の声 は 、 ま で だ が 11 に 筒 騒 抜 が け に 聴えて来るの な つ て 泣 き

「若旦那」

「行ってみよう、茂七」

二人は垜の の後ろへ 廻ると、 木戸を押 開 け 植 木屋 松五 郎

庭に飛込みました。が、

ー あ ッ 」

松五郎 方へ 上に仰向に倒れて、 た つ た の娘お駒、 矢文を結 と目で、 んだままの矢が、 山の手一番と言われた十九の艶姿が、 そこ 玉を延べたように美し に 釘付 けにされ 箆深く突っ立っていたのです。 た 0 b e st 咽喉、 無理は 少し左寄り あ 無慙大地 りませ ん。

「どうした、どうした」

出さな あま 生垣を一と跳びに、後ろから飛ん りの虐たら か った 0 が不思議な位です。 しさに、 ハ ッと息を呑みました。 で来たのは佐 々村佐次郎 0 眼玉 が

4

「お駒――」

「確りしておくれ」

お駒を抱き上げた 0 は 母 親 0 お辰と、 客分で置 (J た親類 0 娘 お

雪の二人でした。

「誰がこんな事をしたんだえ、お駒

お 駒 の白 ( ) 首筋を染 め て、 襟元 ^ 溜 つ た 血 が、 母 親 0 胸 膝 ^

と溢れかかります。

「茂七、外科を呼んで来い」

お駒、 番先 理性を取戻したの 確り しておくれ、 は、 死んじゃ さすがに浪人者の佐 ( ) けな ( ) 次郎で お駒」 した。

少 しょに揺ぶ -狂乱 なる になった母親、 のを見ると、 りました。 犇々と抱きしめなが 膝の上 へ抱き上げたお 5, 駒の、 自 分 の身体 次第に 頼

お駒 誰だい、こんな目に逢わせたのは」

いて、 が しかし、 わななく唇が少し動くと、 お駒はもう正気もあ 宙に物の影を追うよう りません でした。 洞っ ろ に、 な眼 開

った

「若旦那

君

た と言、 そう言 つ たまま、 ガ ッ ク IJ 首を垂 れ て しま つ た

のです。

お駒」

お駒さん」

母親とお雪は左右 いら取り りました。 が、 もうこと切れてはど

うする事も出来ません。

そ 0

何 ? お 駒 がどうしたと?」

飛んで来た のは、 父親の松五郎、 少し 酔 って e st る様子ですが、

と目、 ح 0 様 子を見ると、 お 駒の側 へ行く前に、

Þ りやがったな、 畜生ッ」

恐ろしい勢 ( ) で新助 ^ 掴みか か ります。

郎 馬 鹿 なことをする なし

驚 ( ) て二人 0 間へ割って入 った 0 は佐々 村佐次郎 でした。

馬鹿な事じ Þ ねえ、 娘の 敵を討 つ んだ、 退 ( ) 7 くれ

腰 か ら 抜 11 た 植木鋏を当座 0 武器 に、 新 助目 が けて振 り 冠

のです。

矢が垜を越えた のは過ちだ。 つまらな

( )

事をするな」

次 郎 は 後 ろ か ら羽 掻締 め に ば 5 は 揉 み 合 11 ま

か。 あ な が 町 来 何 べ が ッ ん 良 弓 b な 11 文 娘 ん 何を を、 か 玩も 持 具ちゃ 玉 込 無 に W す だ に る のを か 5, て 調から し ま 戯か ح 6 つ 11 な て 面 畜 事 で 生 聴 を きや 仕 ッ 出 が どうする か す つ て な ح ん 見 *( )* 

せ ん 五十男 佐 々 0 村 佐 刻に 次 な 郎 松 五 郎 そ れ は を 押 本 える 当 に 鋏 0 位 が 本 は 新 当 に 助 に 精 穾 杯 つ 立 で て 兼 た ね ま

松 お ŋ 新 助は 郎 ま 0 萎ょ た 憤 怒 れ な 切 言 ど つ 11 は、 て、 か わ もと 11 た つ ょ 0 お ŋ 駒を殺 間 眼 に やら、 中 に あ た激動 生ま り ま 湿り せ り に 0 打 土 ち 0 0 め され 坐 って て、

切 茂 七 た 娘 に 追 0 死 4 骸 立てら ^ れるように 魂を吹込む術 • そこ は あ ŋ ^ ま 外 せ 科 が来ま 6 た が

検ル 屍し 銭 済 む 親 前 分 に が ع に 通 11 り見て下さ な さ る 0 e y な ん か 廻 ŋ 合

忘 で れ 百 7 町 て こう は 0 重吉 銭 平 形 次 平 は 良 次 0 知 0 11 世 男 恵 話 を で した。 借 に な り よう つ ガラ た ع 事 ッ 八 た あ 0 る 0 八 で 0 す Ŧ. で 郎 ح 御 は 用 聞 無 根 0 仲

る 61 て、 近頃は さす ち 植 が 木 ょ 屋 に 百 e st 商 松 ち 売 Ŧi. 町 ょ 気 郎 0 11 を 重 凄 0 離 吉 娘 11 れ お 押 0 駒 た 家 込 好奇 が みが ^ 稽い あ 心 は つ 矢ゃ た た 動きます。 平 に の 射ら 次。 で、 そ れ 大 7 久 0 死 保 足 取 W 小 町 ŋ 辿

主 矢 古 で 矢 射 で 5 射られ れ た 位 て 死 ゃ 間 だと言えば、 は な か な か 死 何 ぬ 0  $\boldsymbol{b}$ 行ってっ 0 P な ね 4 え。 が、 兄 坊

えよ か り つ た 5 願 つ ちょ て b な 11 ح 11 覗 ことだ、 か し て貰おう 親 分 か

重吉 は 案内 役に 立ち Ĺ りま した。 続く 平 次、 ガ ラ ッ

植 木屋は すぐそこ、 中 ^ 入ると、 全く 眼も当てら れ 松した。

す。

興奮す 衛 検屍 佐 に 若 来 村 b 0 旦 るよ 済 佐 る新助は、 那 か ま 次 れ 0 郎 う か に ぬ 新 死体 にと、 \$ と平次が、 5 助 少 を 松五 は、 撲ち殺 茂七を付 日本橋 調 まだ家 郎 べ どん を て の相模屋ではなり 見よ 家 て な 0 0 娘 う、 中 中 に 0 骨を折って ^ 敵 ま 引 押 入 手伝 を れる 取 で 討 使 ら 込 つ 9 せ、 め、 わ て 11 -有なだ け 0 者を 直す に め 心 た は 11 さま 出 行きま う 地 とで さ  $\boldsymbol{b}$ 松 せ 親 な Ŧi. せ 郎 0 11 喜兵 を ほ ん ょ た。 う。 が、

7

「何をやりゃいいんで、親分」

第一 番 に 後 ろ ^ 廻 つ て、 娘 0 身 体 を 起 てく れ

「こうですか、親分」

恐怖 さえ お た Ш 五. を 郎 刻ん び、 は は 後ろ で、 首 娘 か 0 蒼 5 か 美 ら娘 襟 白 しさを ^ 11 胸 顔 0 破 は 死骸を抱き起 ^ ٤, 壊 不 意 な 殆ど を 41 半身を 程 喰 度な し つ ま た が ひ に たし た。 5 て は て 頸 動 物 碧色 凄く 少 から 歪が 噴 刻 艶ゃ で を 出

「矢へは手を付けなかったろうな」

平次はあたりを見ました。

「誰も手を掛けませ

ん

その上から握 近 e s 母 る 親 結 0 のお辰は、 です。 ん だ文が、 つ たらしく、 涙 鮮 の 隙から、 血 に 結 染ん び目が乱れて、 僅かに引取 で見 る 影もあ りました。 少し滅茶滅茶にな りません 矢 が の 根 の方 か

お か 11 とは 思 わ な 11

ヘエ

八五 郎 はキョ ŀ ン ع て お ります。

形 の 親 分、 向う か 5 飛んで来た矢なら真 つ すぐ か 下 向きに

立つ筈だが」

重吉はさすが に気 が ついた様 子 です。

マそ 0 通 りだよ兄哥、 矢は 上 向 きに突っ 立 つ て 4 る、 踞んだ

ところを後ろからやられなきゃ、 こんな工合 に なるわけはねえ」

平次は矢を抜 いて見ました。 何 の他愛もありません、 ほん の頸

動脈をやら

れ

ただけ

です。

おや

矢の根が普通 の稽古 用 0 では な か ったの です。

新 助 は たしない みだ と言 つ て — 本ず つ はそれを持 つ 7 e s

悪 *( )* j のを射た な

佐 々 村佐次郎は独り言ともな < e st います。 そ 0 間 に 平次は 血 に

染 び 文を、 丁寧に解 ( ) て見ると、

『今夜いつも 0 刻限に木戸のところで逢 いた e st

いう他愛もな 11 b **の**。 お駒どの、 新 の字と署名した、 何 0 疑

11 代物で す。

さん達は騒ぎの あ つ た 時、 どこに (J なす つ

平 次はまだ泣きじ ゃくるお辰に訊ねました。

手で 晚 の支度をし て いましたよ」

お辰はそ の 時 0 事を思 11 出 又ひとしきり

した。

お 前 は ?

縁 側 で縫 物を し て (J ましたよ」

よう。 お雪は そ スラスラと応えて 0 当時に しては 少し嫁き遅れ 、平次をふ り仰ぎます。 気味で、 死 \_ んだお駒と比 + 二 で

る せ ( ) か あまり 見よげな娘 ではありません。

お駒は ?

お隣 りで弓が 始 まると、 何 か 用 事を拵える て 裏 ^ 出 ますよ。 だ か

らこ な 少し忌々いまいま 目 に隆 つ たん でし ょ う

お雪は

しそうで

親方はどこに たんだ」

畑 で 植木 の手 れをして 4 た筈ですが

**筈**?

「ときどき仕 事 0 合間を見て飲 みに行く か 5, 当てに な りません

女房 のお 辰 は 妙なところで、 日頃 0 憤懣を洩らしまし

「今日も飲 ん で いたようだな、 八

「鋏をモ ギ 取 る 時 奈良漬け 臭 4 のをウ ン 吹 掛 け られ まし

ガラ ツ八 は 酸 っぱ ( ) 顔をして見せます。

手 紙 で見ると、 新助とお駒は、 ときどき逢引 て e st たよう

だが、 お 前 さ ん は、 知 ら な か つ た 0 か

知ら W ではございませんが、 若 11 者は 止 め も聴き入 れ ちゃ

く

れません」

お 辰は自信 のな e s 調子です。 恐らく相手は大家の若旦那なので、

見て 見 ぬ 振 りを て ( ) たもので しょう。

「ところで変な事を訊 くようだ が、あれは 親方 0 本当 の 子 か e s

平次はお駒 の美し 11 死顔を指しました。

あんま り似なさ過ぎる。 が お 神さん、 本当のことを言 つ

れ、 どうせ後で知れることなんだから」

「私の連れ子ですよ、親分」

「というと?」

ぁ 0 娘が二つの時前 の亭主に死別れて、 ここへ 連れ 子を承知 で

度 目 0 嫁入 ŋ しま した。 でも、 家 の 人は、 それ は そ れ は お 駒 を

可愛が つ てく れました。 十七年も手塩にかけて育てたんです

も の \_

お辰 は そ れ となく、 夫 0 松 Ŧī. 郎 0 た め に 弁解 お り ま

「これは?」

平次の指はお雪を差しました。

主人の姪ですよ」

、義子と醜 姪と、 ح の 辺にも因縁が絡 んで いそうです。

四

親分、帰りましょうか」

木 違 屋の庭と相模屋 いで人を一人死なせた位 ガ ラ ッ 八 は大きな欠伸ま の寮から離れようとも でし のことで、 て 見せまし 日 しな の暮れる た。 i, た の 親 か b が 分の平次 構 稽 古 わ ず、 矢 の 態 植 間

度が不思議でたまらなかったのです。

待ちな、 八 今晩はきっ と面 白 ( ) ことが あ る **ら** 

「ヘエ――、どんな面白いことで?」

人間 あ を の 松 叩き上げているから、 Ŧī. 部は と通りの男じゃねえ、 あ れ程 の娘を殺され 三道 楽 0 て、 修業が 唯 で引込む 積んで、

平次はそこまで睨んでいたのです。

筈は

ね

え

「金にする積りで?」

「それも五十や百の金じゃあるめえ」

エ 太てえ親父があるものですね

太 か 細 11 か、 もう少し経 って見なきゃ 解 る 11

平 次は な かな か 帰る様子もありません。

それから半刻ばかり。

Þ 相 模屋 0 主 人が 来ま たよ 番 頭

ガラッ八は平次の袖を引きます。

静かにするんだ」

は 平次を 中 に、 濡ぬ れ 縁 に 腰をならべました。

煎がい え 蒲 線 六 寸 畳 香 0 上 を 0 フ ^ 北 ン 0 枕に 間、 ダ 寝か に 検屍 燻ぶ し、 しな 0 すんだ死骸は、 がら、 二枚折屏風を逆様に、 松五 郎 はその前 まだ棺が にも に 手習机をす 神 納め 妙 ず、

小 僧 を揃え、 ポ 口 ポ 口 と涙をこぼ しては、 お茶に紛らせた湯呑

冷酒を呷っております。

屋さ W が お 見 えだよ お 前 さん」

「何を?」お辰は後ろから声を掛けました。

さ男 ま 振 た。 の茂七とは、 り上げ 年 た顔 0 頃五 の前 対蹠的 七八 に堂々 もう相模屋喜兵衛 大 町 とし 人 5 7 お 恰かっ り は恐れ ま 幅さ す。 で、 後ろ つ て 従え 坐 つ て 優

親方、 何にも言わ な 11 伜 に 代 つ て 私が 詫 び

か許 てや って下さい

喜兵衛 は ピ タ IJ を畳 0 Ŀ へ両 手を突きまし た。 が、 松五 郎 は

走る 眼を挙げ てジ 口 リと見た つきり 一言も 41 11 ません。

あんな 綺麗 な 人娘に 死な れて、 親方の気持はどんなだろう、

考えただ け でも 私 b 胸が 痛 く なる どんな事をされ ても決し

怨と は 思 わ な 4

な事 をされ ても か 4

松五 郎 0 血 走 る 眼 は又光 ります。

悪気 で た 事 じ Þ 11 そこを 何 か 勘 弁 つ

° ( 方、 頼 みます」

喜兵衛 は 本当 七重 0 膝 を 重 に 折 り ŧ

なら ね

-え?

チ 勘弁など 木 屋 は お 前 思 11 さん  $\boldsymbol{b}$ 寄 らねえ、 は江戸の 長 者番 なア、 附 に 相模屋さ b 載。 る ほど ん あ 0 分ぶ つ 者や は だ。

言 わ 提 灯 に 釣り 鐘ね それ は 判 って e s るが、 思 11 合 つ た

仲、 目 を ž つ て 許 てや つ た 5 ح ん な事 に は な ら な か つ た 筈

だし

仲を割 か れ て、 危な 11 矢文などを飛ばす か らこ 6 な 事 に な る 6

乏人 名 間 ح 劣と る Þ 夫 Þ 親 0 よう 子 類 え 太 か。 方 か 夫 な に言 は で 0 り なア、 手前 b知 た わ 請 5 11 も悪 れ な 出 と言 相模屋の大将、 て 11 が、 て 11 つ た 時 来 親 せ 0 お 41 俺 駒 め は は て **『あ** '吉原 どん 生き ん と言 無む な な 垢< の難い 若旦那がお前 貧乏人 気持だ つ 0 たそう 魁ん 素 娘だ 入山 0 と思う」 娘を 形 さん 貰 売ばい な に 女た つ <u>^</u> ち Þ つ 夜ょ お 世 貧 駒

「それを言われちゃ、親方」

引 て お つ 込 駒 た ん は 6 身 で だ。 で 11 5 b 投げ れ ると思う こん 兼 ね な な 思 か *( y* 11 様 までさせら ヤ 子 イ だ か 5 逢い 引ぎ た  $\boldsymbol{b}$ 見 娘 て 見 を殺され ぬ

「親方」

 $\overline{\mathbf{H}}$ 郎 0 激 怒 0 前 に 喜兵 衛 は b 利け ません

首び が言 まで ヤ 欲 た か ど 4 0 9 ع た 面 は言 下げ 5 せ て わ 来 ね め え Þ て が 伜 0 つ 首 た で W b だ 0 持 禿茶瓶 つ て 来 P の 唐き が 変んない れ 奴ゃ 手前え

松五 郎 は 湯 吞 0 冷 酒 をガ ブ IJ ع 呷ぉ ると、 中 腰 に な つ て 喜兵衛 を

睨みすえます。

て人 親方 で P 何と言 頼  $\lambda$ で詫びを入れまし わ れ ても一言 P な ょ **ر**َ i s 0 重 今 々 晚 私 0 が ところは 悪 か つ た、 私 0 心 改 が め

済 む う せ め て 線香 でも上 げさして下さい

「ならねえ」

行ざ り 寄 る 喜兵 衛 は 松 五 郎 0 手 に 弾き 飛 ば さ れ ま た。

れ だ け で も受 け て 下 さ 11 0 ほ ん 0 私 0 寸 香<sup>こ</sup>う

の代りだが――

0 まま押 Þ つ た 0 は どう 少 なく 見 て b 百 両 は下 らな

ま か つ た で ょ う。 が、 それを見ると松五 郎 0 忿 怒は爆発点に

模屋 り坊主 そ P 瓢箪野郎をお通夜ひょうたん れ 何 0 を だ か 0 身 か な ら Þ 気 が る 人に入ら る。 。 逆様 な り、 人 に 振 に せ ね 0 えよ。 命 で め つ まで P て て 持 よこ 娘 申 金 が つ し 訳 て あ で 買 来た Þ れ が が ほ な お どま うと れ 9 ( ) ع て、 間 で 思 し 勘 抜 に Þ つ 思 た 弁 け が 因がん ら、 る、 な 11 一業がじ を ん 腹 か か 金 を 持 け 11 奴、 た、 切 根 て 性 伜 相 な は

「親方」

当 あま 掴 り 懸 0 剣 ŋ 幕 か ね に 驚 ま じ 11 き勢 て、 喜 11 兵衛 で す。 b が りま た。 松五 郎 は 本

持 ば そ か りだ な に 有 難 ざまア見 11 金 な Þ 5 が 持 れ つ て 帰 り Þ が れ、 金 を 有 難 が る

の葩の て、 付 け ま よう 郎 か た。 は 5 に、 帛なく 飛出 紗をさら 幸 į, バラバ したのは、 一髪の違 ラと つ た と思 乱 小判 れ いで避けました 散 うと、 で百枚、 ります。 喜兵 嵐 衛 に が 0 吹き散 額 帛 0 紗 あ 5 た は 柱 ŋ た 何 砕 吅 か け き

送 つ さんざん ポ 口 の体で逃げ ポ 口 ع 涙 をこ 帰る喜兵衛と茂七、 ぼ なが ら笑 つ 松 て 五 お 郎 り は そ た。 の 後姿を見

五

晚 お 通 夜 行 つ た 筈 0 新 助 が 木戸 0 外 で、 植

を突かれて死んでいたのです。

見 9 け た 0 は 迎え に 行 つ た番 頭 0 茂七、 そ 0 時 は  $\boldsymbol{b}$ う 夜 が 明 け

0

は

金

事のようで、 ように て おりました。朝露の 茂七を顫え上がらせたのも無理はありません。 半面半身に血を浴びた新助 中に崩折れた形になって、 の死骸は、 何 お駒と となく 同じ

「た、大変だ」

した喜兵衛は、 茂七が這うように 跣<sup>はだ</sup>し のまま飛ん て帰 つ た で出ました。 の を見ると、 妙 に 不 安な 夜を過

「新助」

や生命 抱き起し の余燼も残っては ては見ま た が いません。 朝 露 に 冷 々 ع 洗 わ れ た顔 に は、  $\boldsymbol{b}$ は

「誰がこんな事をした」

死 骸 側 に投 り出 され た の は、 使 *( y* 古 た植 木鋏が 挺、 碧^き 血っ

に染んで、 この下手人を物語っていそうです。

「おや?」

う。 な 茂七 ところを見ると、 およそ下手な字で、 は死骸 0 下に な 夜 つ て のうちからここに  $\epsilon \sqrt{}$ た 浅草 紙がみ を 取 置 出 61 てあったので ま た。 露 濡 れ

――三途の川でお駒が待ってるぞ――

とこれだけ。

とにもかくにも小僧を走らせて、 百人町 0 重吉を呼 んだ 0 はそ

れから四半刻の後。

それをたった一と眼見た重吉は、

到頭やりやがったな」

昨 平次に言わ れた警戒 0) 手を、 宵だ け 解 11 てしまっ

を口惜しがります。

親分、これは、 あんまりじゃありません か、 敵を討 って下さい。

伜も 悪か ったには 相違な いが過ちでしたことのた めに、 命ま

で 取ら れ ち や 叶 わ な 11

喜兵衛は もう下手 人を松五郎 と決 め て か か る 0 で

ッ

重吉 は 飛 ん で 行きま た 植 木 屋 0 戸 П を 吅 戸 は 中 5

開 いて、 バア ع 出た 0 は主人 0 Ŧī. 郎 で す。

松五 郎 お

親

分さん、

お早う

お早うじゃ ねえ、 太てえ野郎だ。 手前ゆうべ 何をや つ

ヘエ ッ、 あ の 一件ですか、 相模屋の禿頭はげあたま 小判を叩き付けた」

「違う そんなつまらねえ話じ ゃ ねえ、 証 拠はみんな挙 つ

んだ。 素直にお縄を頂戴しろ」

何の 証 拠で、 親分」

松五 郎 0 顔に は 何 の蟠り P あ ŋ ま せ

W

ゆうべ お 通夜 に 来た新助を木戸 のところで殺したろう」

え ッ

ば つ れ る な 松 Ŧī. 郎。 娘 0 敵 と言う な ら お に b 慈悲

る、 神妙 に お 縄を頂戴 せ e s

あ

の

新

助が

木戸

0

ع

ろで?」

知ら な と言う 積 ŋ か

探ると 取 出 した の は 条 0 捕 縄

重吉

0)

左

手は、

松五

郎

0

首

に

掛

9

てお

りました。

右手

懐を

つ は 大 笑 だ 11 か にも 0 松 Ŧī. 郎 が 殺 たよ 娘

敵倶に 天を 戴 か ず

そ 41 7 は 親 0 敵だ」

重吉 の 縄は、 そう言ううちにも、 キリキリと松五郎 を縛り上げ

ます。

「あれ、お前どうしたのさ」

鷩 いた 0) は女房のお辰でした。 ろく に眠らなか つ たら e s 脹は れ

た眼を、眩しく外へ出したのです。

「騒ぐなよ。 俺はな、 ゆうべ新助 0 野郎を撲ち殺した ん だ

敵<sup>かたき</sup> 確 かにこの 親父が討った -とお駒 の死骸にそう言っ てく

「お前さん、気でも違やしないかえ」

気は確かだ、酒もまだ飲まねえ なア、 お辰、 手前 は 生 さ ぬ 仲

だからって、 俺がお駒を可愛がりようが足りないような 領を て

たが、 今度はよく判 つ たろう、 俺はお駒が 可愛くて な 5 な か つ

たんだ。 敵を討ったのは俺だともさ、 他の奴であ ってたまる

ものか」

松 五 郎 は 泣 癖 ら 11 眼 を しょ ぼ ょ ぼさせて重 吉 に 追

れました。

「お前さん」

追いすがるお辰。

「達者で暮せよ、後添なんか捜す気になるな、 馬鹿 奴

「それどころじゃな 11 お前さん本当にや った 0 かえ」

「本当ともさ、 あ ん な 野 郎 生かしておけるかおけねえか考えて

見ろ」

| | |

お辰 は タ タ 崩 折 る ٤ 手 放 で 泣 出

好きだか 5 つ て 無 闇 に生まれ 工物を食う な、 馬 鹿野郎」

お前さん、 私 人 お 11 て 行 く のかえ」

当り前だ、畜生」

0 陽 0 豊 か 射 始 め た中を、 は 次第に遠ざか ります。

六

「おや銭形の親分」

そ H の E · 刻 前、 松五郎を番所 ^ 預 け て 朩 ッ たところ

平次と八五郎が訪ねて来ました。

「重吉兄哥、――あれからどうしたえ」

「いやもう大変な騒ぎでしたよ、親分」

重吉にして見れば、『今夜何か一と騒ぎあるだろう』と言 つ た平

次の予言があまり見事に当ったのが不気味でもあった の です。

「そんな事だろうと思 ったから、 神 田からひと飛びにや って来た

ょ

「有難てえ、親分」

「どんな事があったんだ」

松五郎が、 お通夜に来た新助を、 木戸 のところで植木鋏で突き

殺したんで――」

「そんな馬鹿な事があるものか」

平次もすっかり面喰った様子です。

本 人が白状 したん だから、 間違 いあ りません。 そ れ なも

のま て 死 体 の下 へ入れてお いたんで」

「はてな?」

娘の敵を討った てんで大威張りですよ」

「どこにいるんだ、松五郎は?」

「番所ですよ」

「よし、行って見よう」

だ。 番太 次は 百人町 の 老爺と、 の番 重吉 所 飛ん 0 子 分 で行きまし の 下 つ 引 が、 た。 係 生 り同 懸 心 命 0 出役 松 はま

見張っている最中でした。

「親方」

「ああ銭形の親分さん」

松五郎 は 顔 を挙げました。 昂然として、 何 の 恐 れも ありません。

「親方、大変なことをやったそうだな」

と平次。

「ヘッ、ヘッ」

松五郎は泣き笑いをしていたのです。

よく切れるネ、あの脇差は

平次は変なことを言い出しました。

家重代 の 脇差だから、 斬 れ b しますよ」

「一と太刀でやったのかい」

ヘエ」

「見事な袈裟掛けだネ」

「そうでもねえよ、親分」

話が 次第にとん珍漢になる 0 を、 重吉は 酸 つ ぱ 11 顔をして め

ております。

何 書 た物 を置 て あ つ た そう

「ヘエ、何、ほんの悪戯で

「お前のところのお宗旨は何だ

e s

法華ですよ、親分」

「それ でお 題だいもく を書 いて、 手 に か け た 者 0 死 骸 0 側 置 11 0 か、

大した心掛けだな、親方」

「それほどでもねえよ、親分」

郎 0 極 り悪そうな顔とい うも 0 は あ りま せ ん。

あ の 紙 は どこで買ったんだ、 奉書 0 ようだが

日本 は 橋 だ で買いましたよ、 11 に 脱線 し て行くば 特別上等 か ŋ 0) で す。 奉書で」

平次はこの辺で切上げると、 フラリと外へ 出ました。

「銭形の親分」

重吉は狐につままれたような顔です。

「重吉兄哥、 あ の通 りだ、 下手人は松五郎じゃねえ」

「でも白状しましたぜ」

「そう言 って威い 張ば りたか ったんだ、 松 Ŧ. 郎 は そ ん な 男だよ」

すると?」

当 の騒ぎは最 つ て ん だ 初 0 な か ら間違 ら、 松 Ŧī. ( ) だらけさ、 郎 に新 助を怨う む筋 お駒が新 bあるが 助 0 射 た矢 お

駒は 人に殺され たと解 ったら、 松五郎も縄まで打たれて喜ん

いないだろう」

え ッ お 駒は 人に 殺されたと言う ん で?

重吉は 仰天した。 平次の言うのがあまりにも桁外 れです。

笛ぇ 「その通 へ突っ立てた りだ、 奴 が 物置 いるんだ。 の羽目板に立った矢を抜いて、 現場でその証 拠を見せてやろう」 お駒 の 喉<sup>ど</sup>

平次はガラッ 八と重吉を従えて、 もう ( ) ちど植木屋の庭 ^ 入り



©2017 萩 柚月

## ました。

文を待っていたんだ」 がたくさんある。 それ見るが e s *( )* 隣 物置 り の庭で弓が始まると、 0 羽 目 に は、 この通 お り 矢の突っ立 駒はここ へ来 った跡 て矢

## -

「垜を越、 本矢鏃を使ったのほんやじり して、 の羽目 はそのためさ」 ^ 射込むに は、 坊主矢じ Þ 駄目だ。 新

助

父親の あれは女房の連れ子で本当の娘じゃないから、 突き殺せる力が ところで、 松五郎と 無 こに 11 から、 お W るお駒をそっと殺せるのは、 雪の外にはな 俺は最初、 松五郎じゃないかと思った。 お雪では、 殺しておいて新助 母 親 矢で人を のお辰と

0 せ いにすれば、 相模屋から百や二百は強請れる」

昨 が、 夜 0 あ 松 Ŧī. 0 剣幕だ。 郎 は本当 あ 0 れ 娘 ょ は芝居や掛引きで出来ることじゃ り Ś お 駒 を 可 愛が つ て e st る。 。 そ な れ に、

平 の 説 明 に、 ガラ ッ と重吉 0 眼 の前 には、 全く新

0 角度が見えて来ました。

Þ 誰 でしょう、 親 分

つ ち ^ 来て見るが 11

平次は植木屋 の裏口 へ行くと、 そ つ と姪 の お 雪を 呼 出

お雪 本当の 事を言ってく れ お 駒 が生きて いる時 番 執

三十 人位あ 付き 纏き りますよ」 た 0 は誰だ

つ

冗談 じ ゃ な 11

保 小 町 と言 わ れ た お 駒さ ん で すも 0 町 内 者 は N

な付 「そのうちで、 け 廻 したと思っ 番 て うるさくし も間違 4 あ た 0 ŋ は? ません」

お隣 り 0 茂七さん か しら?」

茂七は、 あ 0 時 新 助 0 側 に 11 た 0 です、 お 駒を殺せる道理 は あ ŋ

ませ ん。

「それとも 佐 々 村 さん か しら?」

あ のとき佐 々 村佐 次郎 は、 お茶を飲みに母屋 ^ 帰 つ て、 遥 か 0

後う (J た 筈 で す

お易 変な 頼 11 みだが、 御 用で」 0 家で使っ て ( ) る鼻紙を一 枚貰 11 た 11 が

ŋ お 雪は笑 で す いながら、 が 新助 懐紙を出 0 死体 0 してくれました。 下にあ つ た浅草紙とは違 まことにあり来 います。

七

「お前はお駒に気があったそうだネ」

エ、 恐れ 入 ります。 が、 親 分さん、 町内でお駒に気 0 ねえ

は、地蔵様ばかりで」

茂七は遊 び慣れた人間らしく軽く外らしまし た。

ところで、 お前さんは新助の 側に いてよく知 ってるだろうが

弓を射てから、 悲鳴が 聞えるまでどれほどの 間があったろう」

平次の問は不思議です。

エ、 それが 不思議なんで 煙草半服 ほ どの 間 が あ ŋ ました

が

茂七の顔は伸びたり縮んだりします。 矢が 飛ん でか 5, 悲 鳴 が

聞えるまで、 そんなに 隙ま のある のは何とした事 で しょう。

難う、 それから、 この家 に佐々 村佐次郎さん の 書 11

があるなら、 内証で見せて貰いたいが」

ヘエ、 お手紙が二、三本と、 弓の伝授書があ った筈で

茂 七 は奥から二品三品持って来てくれました。 能筆と噂された

佐次 郎 0) 筆蹟は、全く見事なもので、 新助 の死体の下にあった、

浅草紙 の文字とは比較にもなりません。

平 次は浅草紙 の文字を出 して、 そ つ と比べて見ました。

「違い過ぎるね、親分」

覗いたのはガラッ八の長い顔です。

そ から、 塵紙 か浅草紙があ ったら一枚貰い た いが、 半紙

は *( y* け

ヘエ あまり綺麗じゃ 御座 いませんよ」

茂七は一 下 ·男部屋· か ら浅草紙を二、 三枚持って 来てくれました。

比 べ て 見 ると、 曲者 の遺した紙と全く同じも 0 断ち口までピタ

リと合 います。

う つ、 昨日、 ここ で留守居をし て ( ) た 0 は誰 だ

下 男 の 権治でござ います」

呼 で来て貰おうか

次 は しだ e s に攻撃 0 網を絞ば って行く様子 です。

俺ぉ が 用 事 か

ヌ ッ と庭 へ来たの は、 三十 前 後 山 出 5 ( J 男 で す

つ か 事を訊 くが、 昨夜佐 々 村さん は あ 0 騒ぎの前に お 茶

を呑みに 来た筈だ ね

エ、 来ましたが、 お茶を淹っ れ て上げると、 喉 が乾 (J て 面 倒 臭

えから水をくんろ と言ってね、 柄杓で一杯飲ん で

ーそ から 騒ぎ 0 始まるまでここ に 休ん で 11 なす つ た 0 か

大方そうだん べ (J 俺は直ぐ煙草を買い に百 八町まで 行 つ

誰 頼 み だ

たか

5,

後

0

事

は

知

ん

ねえ」

佐 村様

々

の頼

みだよ」

フム

帰 9 て 来 た 5 あ 0 騒ぎだ あ ッ ` まだ、 そ 0 煙草 佐 々

村様 渡さな か つ た ょ

権 治はあわて て 下男部屋 ^ 飛込むと、 五 匁玉 0 刻煙草を持 つ て

来た 0) です。

ーそ 煙草は 俺 が 持 って行 ってやる、 どれ

平 次は手を伸ば て、 煙草を引ったく るように 庭 0) 方 ^ 出まし

た。

親 分、 下 手 は 11 つ た 誰 で ょ **う**?

とガラ ッ 八。 重吉も覚束ない 顔をして眺め て お ります

まだ解 らねえ、 手前と重吉兄哥は、 ここを真 っ直ぐ

前を通

って、

木戸をあ

けて、

ゆ

つく

り

植木屋

の

裏

^ 出

て

か変 つ たことがあったら、 遠慮なく声を出してもい

ヘエ

りの道を、 何 が 何や 植木屋の裏へ出ました。 ら解 りませ ん が、 ガラ ッ 何 八と重吉は平次に言 の変ったことも ありません。 わ れ た通

や、変っ たことには、 植木屋の裏 ^ 出てから出会したのです。

おや

「どうだ、 俺 の姿は見えたか」

そこには寮の 裏口 で別れた銭 形 平次が 先 廻 り 立 つ て 11 る

ではありません か。

親分、どこを来なすっ た ん で

寮 の裏口 からいきな り植 木 屋 の庭 ^ は 11 れ るんだ。 柴は や要がなめ で

えねえ、 だから、 曲者はこの道を通 ここまで 駈 け 抜 って来てお駒を口 け て 来て \$ 庭や垜の 説 ( ) た 0 あ さ た ŋ か ら見

うえ ッ、 すると

お駒は 聴 くわ けは な 11 0 男 が 力 ッ とな つ たとこ ろ ^ 頭 0 上

羽 目板 だ、 ح 思うと、 矢文を結 前後の見境 んだ矢が 突っ 11 立っ もなく、 た、 そ の矢を抜 ح *( )* つ が邪魔を ( ) て下 か する

き上げるようにお駒の喉を突いた」

二人は固唾を呑みました。

松五 を木 れを聞 松五 けに したのだよ。寮の下男部屋から浅草紙を持出し、変な字を書いて、 曲者は自 郎 戸 てお П くと、 は の仕業と思わせようとしたのが悪か で待ち受け、 腹を立てて、 けばよい 分に 恋敵の新助もやっつける気になり、お通夜に来るの は疑 のを、 4 松五郎の植木鋏で突き殺した、 新助を殺すと言 は 少しも 人間 掛らな が器用なば つ いと思った、 て つ かりに、 騒 た いだ、 余計な細工を 曲者 そ -それだ の上、 はそ

「だがあの字は拙かったぜ、親分」

じゃ 手で書 だ も下手の真似は出来ないものだ」 から左で書 左手で書いたのだよ、ハネるところに左癖がある、 ねえ、 いても巧 ( ) それに下手は上手の真似が出来な い人の字はウマ味がある。 ても右で書いても大した手筋に 名筆も悪筆 違 いように、 ( ) 0 P あ それ つ の 左 癖

「成アる」

残され 次の説 たたた つ 明は一点の た 人 0 疑 人 八間を指 (J もあ りません。下手人は間 て e s る 0 です。 違 11 なく

岡っ引奴――よく当ったよ」

X

X

「あッ」

木立 間 か ら、 ヌ ッ ح 出 来た 0 は、 浪 人佐 々 村佐 次郎 ニヤ

リニヤリと笑う顔でした。

知恵は手前 の方が 少しば か り優るだろうが、 腕 は 俺 0 方 が 確 か

だ。来いッ、三人とも膾にしてやる」

激情に自制心を失う、 ギラ IJ 引抜 11 た 刀、 不思議な変質者ででもあったでしょう。 佐次郎 0 顔は 藍り のように 見えます。 多分

御用だ」

「神妙にせい」

ガラ ツ八 と重吉は左右 に分れました。 正面 からは平次。

手前 0 することは卑怯だ。 二本差の癖に、 何と言う野郎だろう」

こうがれ ツ 」

疾しっぷう 如 く斬込 ん で 来る のを、 引 つ 外 て右 が高々と挙が

りま した。 久し 振 り に平次得意 の投げ銭です。

「あッ」

佐次郎は したたか 眼を打た れた のです。

(編注)

ます。 底本の 作品中には、 なる古典的な文学作品でもあり、 が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異 ままとしました。 身体 の障害や人権に ご理解、 ご諒承のほどをお願 かかわる、 著者が故人でもありますので、 差別的な語句や表現 い申し上げ

挿絵―萩 柚月

初出 「 オ ル讀物」 昭和十一年十一 月号 文藝春秋社

底本 月十五日初版 「錢形平次捕物全集」 第三巻 河出書房 昭和三十一年六

編集・発行 銭形倶楽部



## 銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/